

ふ化最盛期の判定を行わずに クワシロカイガラムシの防除が可能です。

野菜・茶業研究所

クワシロカイガラムシは茶の難防除害虫で近年県内でも被害が拡大している。クワシロカイガラムシは、年3回ある幼虫のふ化時期が防除適期であるが、ふ化期の見極めが難しく現場では適期に防除されていないことが多い。平成19年12月に新規登録となったピリプロキシフェンMC剤(商品名プルートMC)は一番茶萌芽前の1回散布で効果が得られ、ふ化時期の判定を行う必要が無い剤として普及が期待されている。今回その防除効果について紹介する。

【普及したい技術のポイント】

萌芽前の2月下旬～3月上旬(摘採45日前まで)にピリプロキシフェンMC剤1000倍液を1000L/10a量散布すると高い防除効果が得られ、第1世代～第3世代まで防除効果が持続する。

【クワシロカイガラムシに対する防除効果】

ピリプロキシフェンMC剤の散布でクワシロカイガラムシの発生を抑制できる。無散布、慣行防除で第1世代から第3世代へと発生が増加する中、ピリプロキシフェンMC剤散布では発生を抑制できる(図1)。

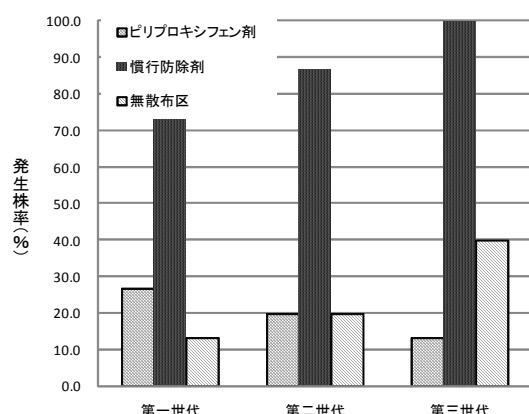


図1 雄繭発生株率の推移 (平成19年度)

*ピリプロキシフェン剤は3月9日に、慣行防除剤は第一世代のふ化最盛期の5月23日にそれぞれ1000L/10a散布した。

表1 慣行薬剤とのコスト比較

防除薬剤	防除回数	薬剤コスト 円/10a	労働時間 分/10a	労働コスト 円/10a	薬剤+労働コスト 円/10a
プルートMC 1000倍	1	20,000	60	1,700	21,700
慣行防除剤 1000倍	1	6,400	60	1,700	8,100
	2	12,800	120	3,400	16,200
	3	19,200	180	5,100	24,300



クワシロカイガラムシ雄繭被害状況

【慣行防除剤とのコスト比較】

多発生園で年3回散布しないと発生が抑えられない園や、一番茶摘採時期と第1世代ふ化期が重なる園では本剤の使用が効果的である。薬剤コストだけで比較するとピリプロキシフェン1回散布は慣行防除剤の3回散布と同等であるが、散布労力負担を考慮すると慣行剤3回散布よりも低コストである(表1)。

【利用上の留意点】

- ・本剤は蚕毒性が強いため購入する際に専用の手続きが必要で、使用後の空容器の回収が義務づけられている。
- ・摘採前45日までに散布を終える。
- ・多発生園で更新予定のある園では、一番茶後に更新を行い第1世代発生期に慣行剤を散布する。